

**「道路政策の質の向上に資する技術研究開発」(平成 28 年度採択)  
研究概要**

番号	研究課題名	研究代表者
No.28-5	アジア都市における ‘場’の機能を持った道路設計・運用に関する研究開発	横浜国立大学 教授 中村文彦

交通結節点徒歩圏の道路空間について、人間中心の都市活動拠点化を実現するため、大きな研究目的として、(1)国際的に研究・実践が進む「場(Place)」の概念・計画・運用手法を総括し、同観点からアジア都市における自生的な道路の利用・使用・占用状況の評価を行うこと、(2)アジア都市の自生的「場」を交通結節点運用に組み込むことへの受容可能性を明らかにすること、(3)そうした結節点の運用を支援するツールの提案と実用性検証を設定した。得られた成果から、国内自治体レベルで「場」の計画・運用を導入できる技術パッケージを構築する研究開発である。

### 1. 研究の背景・目的 (研究開始当初の背景・動機、目標等)

本研究ではアジア都市における交通結節点徒歩圏の道路空間を、人間中心の都市活動の拠点となる「場(Place)」として捉え直した上で、優先的に設計・再配分していくべきものとする。

具体的には、ふさわしい交通手段として歩行者及び公共交通利用者に焦点を当て、①結節点特異性に最適な道路の幾何構成導出方法、②地域の気候や文化的背景を反映した運用（催し等を含む利活用及び維持管理）の観点を踏まえた道路再配分・道路付属物配置方法、及び③市民のモーダルシフトを促す広域交通計画を自治体レベルで導入できる技術パッケージとして構築する。加えて、持続性の観点から④運用に係る人的資源育成手法を合わせて提案する。

さらに、技術パッケージを国内都市に適用する社会実験実施、アジア都市への実用性を踏まえたヒアリングによる評価から、効果の実証と実装に向けた課題を明らかにする。

### 2. 研究内容

(1)国際的潮流における「場の機能」に関する研究とその道路行政への適用状況を明らかにした。

(2)日本を含むアジア都市の交通結節点の運用実態調査、同観点からそうした都市における自生的な道路の利用・使用・占用状況の評価を行うことによって既存方法論の適用可能性と課題を整理し、技術パッケージを提案した。

つまり、成果とする技術パッケージは、

①基本的には、70年代以降、都市再生の実績をあげてきた国際的な「場(Place)」の計画・運用手法に基づくこととし、特に路上交通結節点への適用がふさわしい手法を選択、組み合わせ構築

②他方で上記の「場」については欧米都市の議論が中心のため、アジアの文脈を考慮することが必要であり、アジア都市の自生的「場」の利点導入及び問題緩和のための手法を示す

こととし、国内の道路行政にも資するアウトプットとした。

(3)上記(2)②について東南アジア都市交通結節点における社会実験を通じて、アジア都市の自生的「場」を交通結節点運用に組み込むことへの受容可能性を明らかにし、提案パッケージの改良を行った。また、そうした結節点の計画・運用を支援するツールの提案と実用性を検証した。

### 3. 研究成果 :下記に関連した論文公開、学会発表を行った。

#### ①「場の機能」総論

→国際的潮流における「場の機能」に関する研究とその道路行政への適用状況を明らかにした。「場の機能」に関する研究・実践は、主に英国、米国、デンマークで進んでいるが、研究の系譜、それぞれの手法の特徴と評価指標、道路行政にて適用すべきフェーズ(計画段階、管理段階、再整備検討段階)を提示した研究はなく、本研究においてはじめて体系的に提示した。これらの知見を活かし技術パッケージの構築を行った。

#### ① アジア都市における「場」のあり方提示

① で得た、生業・あふれ出しの場の存在を前提とした歩行環境混雑度/場の質指標を用いて、ケーススタディ都市(タイ・コンケン市)における自生的な道路の利用・使用・占用状況の再評価を行い、自生的な場が、パラトランジット利用者の歩行経路として選択されていることや若年層がそうした場のある道路環

